

を初め数名の方に何とか協力していただき、充実したフィールドを組んで差しあげられた。一方会議出席もお願いし御当人もようやく承諾されて、結果的にはプレ・ポスト・コンGRESSを含め十分に活用されることにはなったのである。

偏屈というのではなく、慎しみ深くストイックな感じで、人と徒らに付き合うのを好まず、会議嫌いのタイプとお見受けした。西洋人は社交家ぞろいという錯覚をとかく持ちがちだが、東洋的と感じられる程に、控え目な方である。私自身は繁忙に過ぎていたため、やっと9月末に、一日だけ鎌倉にフォルンドラン先生を御案内することができた。ジトジトした雨の降りなすむ中での、古い文化に寂びた翠の木蔭を殊更に好まれた様で、「もっとも印象的な日本だ」と感に堪えぬ面持で言われ、御気嫌な一日であった。  
(1981年1月18日)

## ホワイト先生のこと

井 内 昇

I G C開会式の前日、国際展示場受付で記録を整理していた時、ふと視線を感じて頭を挙げると、眼の前に一人の老外人が立っていて、微笑みながら手をさしのべ話しかけてきた。“How are you, Mr. Inouchi! Nice to see you again!”。これが恩師ホワイト先生との16年振りの再会だった。

2度の留学中、私はワイズ教授、ハリス教授を初め多くのすぐれた恩師に直接教えを受ける幸運に恵まれたが、ホワイト先生もシカゴ時代の恩師の一人である。しかし、先生との個人的なおつき合いは余り無かった。当時、先生は大統領の顧問や国際機関のプロジェクトの責任者として多忙で、シカゴを留守にされることが多かったし、その中で受講できた唯一のクラス「経済地理学」も難かしすぎて途中で放棄してしまった。要するに、先生にとって私は印象に残る学生では無かった筈だ。だから、先生がI G Cに来られても、私のことは覚えておられぬだろうと諦めていた。

それだけに、突然先生から声をかけられた驚きと喜びは大きかった。驚きと喜びでろくにご挨拶も返せない私に、先生は矢継ぎ早に、「君は東京のプランナーだった筈だが、今は何の仕事をしているのか?…そうか、大学に移ったのか、……それは君にとって大変よかったと思うが君はどうなのか?……」と話しかけてこられる。次第に落ち着きを取り戻しながら、16年前と変らぬ先生の温いお人柄を再確認していた。

ホワイト先生、つまり、Gilbert F. White 教授の名は、環境問題に関心を持つ地理学者なら知らぬ人は無いだろう。今回のI G Cでも、ゼネラル・シンポジウムをはじめ、多くの会合で指導的な役割を演じられ、さらに、世界の地理学者を代表する数人の一人として公開講演をされている。しかし、先生はそのすぐれた学問上の業績とは別に、謹厳な中に相手への思いやりに溢れる温い人柄で多くの人々に敬愛されていた。その精悍な容貌、とくに鷹のように鋭いまなざしからは、一見近寄り難い印象を受ける。確かに研究、教育に関しては、先生には妥協を許さぬ厳しさがあつた。この厳しさは、当時の学生仲間の噂では先生が熱心なクエーカー教徒だからで、先生が最も厳しいのは自分

自身に対してであるということだった。生活が大変質素なことはお宅にうかがった時にその一端を拝見したし、これも噂だが、政府や国際機関の公務で海外に旅行する時は、最高レベルの旅費を受けても飛行機やホテルは低クラスのものしか利用せず、帰国後、余った額は必ず返却されたとか。

このような厳しい生活態度の反面、研究、教育を離れた場での先生はやさしい方だった。

このことに関連してひとつの小さな事実を思い出す。現在、先生と同じ環境問題の分野で活躍中のK教授は、これも学生仲間の話では、貧しくて工場で働いていた時、その才能を惜しんだ先生が彼に進学をすすめ、K氏は先生の経済的援助で大学を卒業できたという。常織的に考えれば、こういう師弟関係では、普通、弟子は師に対して二重に遠慮があるだろう。しかし、先生はK氏にひげ目を感じさせないよう心をくばっていたに違いない。K氏は、或る研究著作の「はしがき」の中で、世話になった多くの人々の名を挙げて謝意を表しているが、その最後を次の文章で結んでいる。

“… Finally, and most important, there is Gilbert F. White, teacher, adviser, and friend.”

## 中国の少数民族

内藤博夫

中国は漢民族が94%と圧倒的多数を占めている国であるが、55の少数民族を含む多民族国家である。ソ連には200近くの少数民族がいるという。これらの国々では国内諸民族の平和共存を実現することが国政の重要な課題となる。たまたま一昨年夏の夏と昨年暮れに中国を旅行し、少数民族の人たちと接する機会があったので、少数民族の問題についてふれてみたい。

一昨年の主な旅行先は中国の西域であったが、新疆ウイグル自治区のウルムチとトルファンでウイグル族の生活と文化の一端にふれることができた。都市・農村を問わず、要所要所に掲げられている各種のスローガンは中国語とウイグル語で書かれていたのが印象的だった。漢民族とトルコ系のウイグル族とは容貌によってある程度は区別することができたが、ウイグル族はカラフルな民族衣裳をまとっていたので見分けることは容易だった。中国人ガイドの説明では、中国で大問題になっている産児制限は少数民族には適用されていないということだった。当時、北京では全国人民代表大会が開かれており、1人っ子政策が決議されたと報道された直後だっただけに、中国政府の柔軟な政策に感心したりした。

昨年暮れの旅行は香港、広州、桂林を経て南寧に至るもので、桂林と南寧は広西チワン族自治区にある。この自治区最大の少数民族チワン族は中国全土に1,200万人、広西チワン族自治区内に1,100万人いるという。ちなみに西域最大の少数民族ウイグル族は550万人である。我々が訪れた南寧郊外の人民公社では、住民の8割はチワン族であるということだった。人民公社の概況説明に当たってくれた方もチワン族だったし、我々が訪問した農家の方もチワン族だった。この農家では75才の老婦人が応対してくれたが、この人は中国語がわからず、案内してくれた人民公社の方と我々一行の中国人通訳の2人による二重通訳で会話をかわすこととなった。この例からも明らかのように、少数民族とし